

Title	心理学的知恵研究の展望と発達の検討 : 「知恵のある」状態の連続性と非連続性
Author(s)	春日, 彩花; 佐藤, 眞一; 高橋, 正実
Citation	生老病死の行動科学. 2017, 21, p. 15-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60541
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

心理学的知恵研究の展望と発達の検討 —「知恵のある」状態の連続性と非連続性—

Review of psychological studies of wisdom: Continuity and discontinuity about being “wise”

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) 春日 彩花¹
(Osaka University, Graduate School of Human Sciences) Ayaka Kasuga
(大阪大学大学院人間科学研究科) 佐藤 眞一
(Osaka University, Graduate School of Human Sciences) Shinichi Sato
(イリノイ州立ノースイースタン大学心理学部) 高橋 正実
(Northeastern Illinois University, Department of Psychology) Masami Takahashi

Abstract

While wisdom is generally understood as an ideal psychological state in the late adulthood, its developmental characteristics are often overlooked (e.g., continuous vs. discontinuous process). In this article, various definitions and studies of wisdom in the field of psychology were reviewed. In particular, from a developmental perspective, the conceptual definitions of wisdom were discussed followed by an examination of their assessment protocols. Then, a tentative conclusion of how wisdom should be understood as a developmental construct is presented.

Key words: wisdom, definition, measurement, human development

はじめに

近年、世界的に高齢化が進み、日本の高齢化率も27.3%に達して(総務省統計局, 2016)、人口の4人に1人が65歳以上の高齢者であるという時代になった。このように高齢化が急速に進行する中、最近では、加齢に伴い衰退する能力だけでなく、生涯を通じて高まっていく力にも注目が集まっている。

成人期以降にあらわれると考えられている能力・態度のひとつに「知恵(wisdom)」がある。最初期に知恵という概念に注目した心理学者であるHall(1922)は、知恵の発達と、成人後期にみられる瞑想的態度や達観したような穏やかさ、公平さ、道徳的な教訓をくみ取ろうとする態度などが関係していることを指摘し、人間発達の終期における理想的な

能力として知恵を位置づけた。また、生涯発達の観点から心理社会的発達理論を提唱したErikson(1982)は、発達の最終段階で直面する課題に関する人間的な強さとして、知恵を挙げている。その他にも、知恵を人間発達におけるポジティブな結果として位置付けている研究は多い(Arlin, 1990; Clayton & Birren, 1980; Kramer, 1990, 2000; Labouvie-Vief, 1990; Orwoll & Perlmutter, 1990; Pascual-Leone, 1990 など)。

このように、「知恵」は、成人期以降に高まり得るポジティブな能力として理解されていることがわかる。実際、知恵は我々の人生において、様々な形で貢献することが指摘されている。第1に、知恵のある人は、自他の直面している問題をより適切に解決することができると考えられる(Baltes & Smith, 1990; Baltes & Staudinger, 2000; Kramer, 1990; Mickler & Staudinger, 2008; Sternberg, 1985; Yang, 2013)。文学の中でも、賢明な問題解決をする人物の姿を通して

¹ Correspondence concerning this article should be sent to; Ayaka Kasuga, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka, 565-0871, (u938621c@ecs.osaka-u.ac.jp)

「知恵」が描かれることは多い (Chinen, 1987; Yang, 2013)。第2に、知恵のある人には、良い助言者としての役割があると考えられる。知恵モデルを提案した Kramer (1990) は、知恵の機能のひとつとして、優れた助言者としての役割を指摘している。また、Ardelt (2005) が人生経験と知恵の関係を調べるインタビューを行った結果、知恵の高い高齢者は、人生において危機や障害に直面した時の対処方法を知っており、その方法を人々に教え導きたいと考えていたことが分かった。さらに、哲学や心理学の専門家ではない一般的な人々にも、知恵のある人は、良い助言者であると認識されているのだという (Clayton & Birren, 1980; Sternberg, 1985; Yang, 2001)。そして第3に、知恵が、精神的な安定性や幸福感と関連していることが、これまでに明らかにされている (Ardelt, 1997; Takahashi & Overton, 2002; Webster, Westerhof, & Bohlmeijer, 2014)。知恵には、人生を回顧し、その意味を探ったり内省したりする機能があることが指摘されているが (Kramer, 1990)、このことが自己発見や自己実現の機会となり、認知や感情の統合に関わる内的な満足感につながる可能性があるとも考えられている (Takahashi & Overton, 2002)。以上より、知恵は、特に身体機能の低下やネガティブなライフイベントが増えるとされる高齢期をより幸福に過ごすために貢献し得る能力のひとつであると言えるだろう。

しかし、高齢者全員が知恵を有しているわけではない。知恵の発達の要因や過程に関する探究は、これまで盛んに行われてきている。そうした知恵の発達に関して言及する際に重要となるのは、「知恵がある」状態と「そうでない」状態をどのように理解し、区別するかということであろう。

そこで本稿では、「知恵のある」状態が心理学の研究においてどのように理解されてきたかについて、3つの観点から検討する。第1に、「知恵」の定義に関する研究を概観し、その多様な見解を整理する。第2に、知恵の測定法に関する研究の動向を説明し、その中で「知恵のある」状態がどのように扱われてきたのかを述べる。第3に、知恵の発達に関する研究の動向を説明し、「知恵があるとは言えない」状態から「知恵のある」状態への変化がどのように説明されてきているかを明らかにする。

「知恵」という概念の探究

知恵は、古くから宗教や哲学、文学、日常生活など様々な文脈で言及されてきた概念である。例えば知恵文学として知られる「ソロモン王の知恵」(列王記, 3-11) では、神によって知恵を得たソロモン王が、ひとりの赤ん坊をめぐる「自分こそが母親だ」と主張し合う2人の女を前にして「生きている子をふたつに断ち切り、半分ずつ与えよ」と家来に命じ、親権よりも子どもの命を優先した女を本当の母親であると判じている。このように、「知恵」が、賢明な問題解決をするための能力として描かれることは少なくない (Chinen, 1987; Yang, 2013)。また、「生活の知恵」などと言われるように、日常のちょっとした工夫を指して「知恵」ということもある。さらに、仏教の文脈においても、真理をみきわめ善悪を分別する心の作用のことを「智慧²」と称している。

このように、「知恵」は様々な場面で用いられる概念であり、一義的に理解することは難しい。以下では、「知恵」が、心理学分野において、どのように定義されてきているのかということについて説明する。

知恵の概念研究

知恵という言葉が最初に用いられたのは、紀元前2500年頃のエジプトであった (Crenshaw, 1976)。その後、哲学や宗教、文学などの中で、知恵という言葉は盛んに使われてきた歴史がある。また現在でも、「あの人は知恵がある」と評価をする時や、実用的な知識の集合を指して「知恵袋」というように、「知恵」という言葉自体は日常的に使われている。

しかし、知恵はその概念的曖昧さゆえに科学的に扱うことが難しく、言葉としての歴史の長さや親しみの深さに反し、最近までほとんど研究されてこな

² かつては仏教の文脈だけでなく「智慧」という漢字が使用されていたが、「智」と「慧」の両方とも昭和21年に定められた当用漢字(当面使ってよい漢字)になく、さらにその規制を緩めた常用漢字にも含まれなかった。そして昭和31年7月5日、国語審議会によって「智慧」を「知恵」と書き換えることが報告され、一般的には「知恵」と記されるようになった。Takahashi (2013) は、この「知恵」を、日本的な宗教色の薄い言葉であると指摘している。なお、現在でも仏教の中では「智慧」と表記される。

かった。知恵が心理学の分野で実証的に研究されるようになったのは1980年前後のことであり、その試みは、「知恵」という言葉を科学的に定義するという概念の探究から始められた (Clayton 1975; Clayton & Birren, 1980)。

知恵の概念研究には、①歴史的な文献の中で知恵がどのように位置づけられてきたかを探求する方法 (知的考古学)、②専門家ではない一般の人々が「知恵」をどのような概念としてとらえているのかを明らかにする方法 (暗黙的理論研究)、③心理学の理論の中で「知恵」を定義する方法 (明示的理論研究) がある。

心理学において知恵の概念を最初に検討した Clayton & Birren (1980) は、歴史的な文献の中で知恵がどのように位置づけられているかを明らかにする一方で、専門家ではない一般の人々が「知恵のある人」をどのように捉えているのかについて、多次元尺度法を用いて調査を行った。具体的には、予備研究で抽出された、「知恵のある人」に関係する12個の単語、つまり「経験のある (experienced)」「直観的な (intuitive)」「内省的な (introspective)」「実用的な (pragmatic)」「理解力のある (understanding)」「寛大な (gentle)」「共感的な (empathetic)」「知性のある (intelligent)」「穏やかな (peaceful)」「知識豊富な (knowledgeable)」「ユーモアのセンスがある (sense of humor)」「注意深い (observant)」に、「年を取った (aged)」「自分自身 (myself)」「知恵 (wise)」の3つを加えた15単語を組み合わせて105個の刺激対を作成し、青年 (31名、平均21.3歳)・中年 (23名、平均49.2歳)・高齢者 (29名、平均70.1歳) に提示して、単語同士の類似度を5件法で判定させた。その結果、彼女らは知恵を、認知・内省・感情の要素の統合であると定義づけた。またこの調査を通して、「知恵」という概念のとらえ方が、年齢群ごとに異なっていることも明らかになった。

Sternberg (1985) は、芸術、経営学、哲学、物理学の専門家および一般の人々を対象として、「知性」「創造性」「知恵」という3つの概念の関係性を探る一連の研究を行っている。彼は予備研究として、芸術、経営学、哲学、物理学の専門家には各分野における「知性のある人」「創造性のある人」「知恵のあ

る人」の行動特性を尋ね、一般の人々には、一般的に「知性のある人」「創造性のある人」「知恵のある人」といった場合の行動特性を尋ねた。その後、予備研究において少なくとも2回以上記述された行動特性を同一集団に対して提示し、それらが「知性のある人」「創造性のある人」「知恵のある人」の特徴としてどの程度当てはまるかについて9件法で判定させたところ、各40種類の行動特性が抽出された。これを40名の大学生に提示し、「知性のある人」「創造性のある人」「知恵のある人」のそれぞれにおいて、同時に見られそうな行動特性同士をまとめて分類するよう求め、多次元尺度法を用いて分析した結果、知恵に関しては、「推論能力 (reasoning ability)」「賢明さ (sagacity)」「思想や環境から学ぶこと (learning from ideas and environment)」「判断力 (judgement)」「情報の迅速な活用 (expeditious use of information)」「洞察力 (perspicacity)」の6つの要素から成ることを見出した。

また Baltes を筆頭とするドイツのベルリン・グループは、知能研究をもとに、知恵に関わる知識に注目した。彼らは知恵を、人生の意味と行動についての専門的な知識であると定義し (Baltes & Smith, 1990)、知恵の測定法を開発して (Staudinger, Smith, & Baltes, 1994)、暦年齢 (Baltes & Staudinger, 2000; Baltes, Staudinger, Maercker, & Smith, 1995; Smith & Baltes, 1990; Staudinger, 1999) や職業経験 (Smith, Staudinger, & Baltes, 1994) のほか、知性・認知スタイル・人格特性等と知恵の関連を調べるなど (Staudinger, Lopez, & Baltes, 1997)、一連の実証的な研究を展開している。

こうした先駆的な実証研究を皮切りとして、現在に至るまで、多くの研究者が、様々な方法と観点から「知恵とは何か」という問いに取り組んできた (Ardelt, 1997; Arlin, 1990; Kramer, 1990; Kitchener & Brenner, 1990; Labouvie-Vief, 1990; Levenson, Jennings, Aldwin, & Shiraishi, 2005; McKee & Barber, 1999; Meacham, 1990; Mickler & Staudinger, 2008; Orwall & Perlmutter, 1990; Takahashi & Bordia, 2000; Webster, 2003, 2010; Yang, 2001 など)。特に、上述のベルリン・グループは数々の実証研究を行い、注目を集めてきた。しかし、ベルリン・グループは、知恵の中

でも知識の側面に重点を置いていたため、知恵の感情的側面を無視していることや (Ardelt, 1997), 知恵の実利的な側面にのみ着目した狭義の概念であることなどが批判されている (Takahashi, 2015)。このように、「知恵」という概念の共通見解は未だ十分に確立されておらず、いまなお、「知恵」は研究者ごとに様々に定義され、研究されている。先行研究にみられる知恵の定義としては、Table 1 に示したようなものがある。

知恵の「機能的側面」と「構造的側面」

「知恵」の定義は多様だが、先行研究を分類すると、2つの観点が存在していると考えられる。Takahashi & Overton (2002) は、知恵には2つの側面があるとして、知恵を包括的に捉える見解を提案している。本稿では、この Takahashi & Overton (2002, 2005) による包括的知恵発達理論の枠組みを参考に、知恵の概念に関する先行研究を「機能的側面」と「構造的側面」に分類し、包括的に理解したい。

包括的知恵発達理論 Takahashi & Overton (2002, 2005) は、知恵の文化差 (Takahashi & Bordia, 2000) と歴史的な検討 (Takahashi, 2000) を既存のエリクソンや新ピアジェ派理論に当てはめ、知恵には分析的側面 (analytical mode) と総合的側面 (synthetic mode) の2つの側面があると考えて、包括的知恵理論を提唱した。彼らによれば、分析的側面には、実利的な問題解決のための手段的能力である知識量や情報処理機能などが含まれる。分析的側面に含まれる要素は、経験全体を細分化し、ある経験の一部と他の「部分」との関連性に焦点を当てたものである。例えば、先述の「ソロモン王の知恵」(列王記, 3-11) や「生活の知恵」でいわれているような「知恵」は、問題解決に直結するような判断力や知識などの能力を意味していることから、知恵の分析的側面に含まれるものであると言える。

これに対し、総合的側面では、ある経験を「統合された全体像の一部」として理解し、より包括的に解釈するような性質が含まれる。つまり、個々の機能ではなく、知恵に関する行動の根底にある心理構造に関する側面であるといえ、心理構造の変容性や、心的過程の統合性など、発達の原動力ともなる

ような心の働きが含まれる。この観点から言うと、例えば先述の「仏の智慧」などは、実利的な判断力や知識ではなく、経験を通して真理を見極め、自己を統合していくような根本的な心の作用を意味していることから、知恵の総合的側面に含まれるものであると考えられる。

ただし、注意すべきは、この包括的知恵発達理論が、ひとつの行動を2つの観点から記述するための枠組みであるということである。つまり、ある知恵に関係する行動を観察する際、行動の機能や手段に注目した場合は知恵の「分析的側面」を見ており、その根底にある心理構造に注目した場合は知恵の「総合的側面」を見ているのだといえる。例えば、優れた問題解決をする人がいるとして、その知識量や判断力などの手段的能力に注目して「知恵がある」と評価する場合は、知恵の分析的側面を見ていると考えられる。一方で、その人の、過去の経験を深く理解する姿勢や、自分の人生に一貫性を見出しており感情が安定しているなど心理構造に注目して「知恵がある」と評価する場合は、知恵の総合的側面を見ていることになる。Takahashi ら (2002, 2005) は、この2つの側面を包括して「知恵」とであると定義しているのである。

機能的側面と構造的側面 本稿では、この包括的知恵発達理論をもとに、先行研究を分析的側面と総合的側面に着目したものであると考えて分類し、知恵の2つの側面をそれぞれ「機能的側面」と「構造的側面」として再定義した。

本稿でいう機能的側面は、問題解決のための手段的な個別の機能を含んでおり、知識や情報処理能力のような、問題に取り組む際に直接的に用いられる資源や個々の能力の熟達度に着目するものである。例えばベルリン・グループは、知恵を人生の意味と行動についての専門的な知識であるととらえているが (Baltes & Smith, 1990), 彼らは人生によりよく適応していくための能力として知恵を定義しており、さらに「知恵に関する行動」に見られる実利的要素の一部である「知識」を扱っていることから、知恵の機能的側面に着目していることが分かる。この他にも、知恵を「疑問を見出す能力」(Arlin, 1990), 「抽象的かつ複雑に推論する能力であり、困難な問題に

Table 1 定義の多様性

著者	出典刊行年	定義	観点
Clayton & Birren	1980		
Ardelt	1997	認知的, 内省的, 感情／共感的な人格を統合する力	構造
Erikson	1982	死そのものに向き合う中での, 生そのものに対する聡明かつ超然とした関心	構造
Baltes & Smith	1990	人生の意味と行動についての専門的な知識	機能
Arlin	1990	疑問を見出す能力	機能
Kitchener & Brenner	1990	抽象的かつ複雑に推論する能力であり, 困難な問題に対して的確な判断を下す能力。知識に対する認知的態度であり, 不確実性の理解をもたらす	機能
Kramer	1990	認知の発達 (相対的, 弁証法的思考) と感情の発達 (感情調整, 自我の発達, 意識と無意識の統合) の組織的な統合	構造
Labouvie-Vief	1990	2つの態度 (認知や知能などの「客観的な」態度 [logos] と, 感情などの「主観的な」態度 [mytos]) を弁証法的に統合する力	構造
Meacham	1990	知識の可謬性に気づき, 確信することと疑うことのバランスをとる力	機能
Orwall & Perlmutter	1990	認知と人格を統合する力	構造
Wink & Helson	1997	対人的な関心や技能 (実践的知恵: 共感性, 理解力など) と, 超越的なことについての関心や技能 (超越的知恵: 自己超越, 知識の限界についての認識, 哲学／精神性への傾倒) から成るもの	機能&構造
Sternberg	1998	共通善に到達するという目的に向けて, 個人内, 個人間, そして社会的関係のバランスをとりながら環境に適応するために, 価値観の影響を受けつつ暗黙知を適用する力	機能
McKee & Barber	1999	誰にでも起きる行動や思考における間違いを見抜く力	機能
Baltes & Staudinger	2000	優れた知性と徳に向けて知識を組織化・統合する, 認知的かつ動機づけ的なメタ・ヒューリスティック	機能
Takahashi & Overton	2002	実利的な問題解決のための手段的側面 (分析的側面: 知識, 問題解決力等) と, 知恵に関する行動の根底にある心理構造的側面 (総合的側面: 内省的理解力, 共感性, 感情調整力等) の相互作用	機能&構造
Levenson, Jennings, Aldwin, & Shiraishi	2005	自己超越 (self-transcendence)	構造
Mickler & Staudinger	2008	自分自身の人生について洞察する力 (個人的知恵) と, 一般的な人生について洞察する力 (一般的知恵) から成るもの	機能
Yang	2008	思考を統合し, その統合された思考を行動に移し, その行動によって良い結果が導かれるという, 実生活における一連の過程	機能
Webster	2010	自他における最適な発達を促進する危機的な人生経験に対処するための能力, 意志, 応用力	機能

注: 観点の欄にある「機能」は, 知恵に関する行動の一部やその機能 (機能的側面) に注目した研究, 「構造」は, 心理構造を統合あるいは変化させようとするような心的特徴 (構造的側面) に注目した研究であることを意味する。

対して的確な判断を下す能力」(Kitchener & Brenner, 1990), 「知ることと疑うことのバランスをとる力」(Meacham, 1990), 「暗黙知」(Sternberg, 1998), 「行動や思考における間違いを見抜く力」(McKee & Barber, 1999), 「認知的かつ動機づけ的なメタ・ヒューリスティック」(Baltes & Staudinger, 2000), 「自他の人生を洞察する力」(Mickler & Staudinger, 2008), 「実生活における思考と行動に関する一連の過程」(Yang, 2008), 「危機的な人生経験に対処するための能力, 意志, 応用力」(Webster, 2010) と捉えたものなどは, いずれも知恵に関する行動の一部やその機能に焦点を当てていることから, 機能的側面に注目した研究に分類されると考えられる。

一方で構造的側面は, より包括的に心理構造に働きかける(統合・変容する), 発達の原動力ともいえるような性質に注目するものである。したがって, 機能的側面では外的な事象を扱う能力に焦点を当てているのに対し, 構造的側面では内的な事象を扱う性質に焦点を当てているとも言えるだろう。例えば, 前述の通り知恵概念の検討を最初に行った Clayton & Birren (1980) や, その理論を継承した Ardel (1997) は, 知恵を認知・内省・感情を統合する力であると解釈しており, 各機能に着目するのではなく, より包括的で根源的な心的特徴として知恵を定義していることから, 知恵の構造的側面に着目しているといえる。この他にも, 知恵を「死そのものに向き合う中での, 生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」(Erikson, 1982), 「認知の発達(相対的, 弁証法的思考)と感情の発達(感情制御, 自我の発達, 意識と無意識の統合)の組織的な統合」(Kramer, 1990), 「認知や知能(logos)と, 感情(mythos)を統合する力」(Labouvie-Vief, 1990), 「認知と人格を統合する力」(Orwall & Perlmutter, 1990), 「自己超越」(Levenson, Jennings, Aldwin, & Shiraishi, 2005) ととらえたものなどは, いずれも心理構造を統合あるいは変化させようとするような心的特徴に言及していることから, 構造的側面に注目した研究に分類できるだろう。

このように知恵を2つの側面から捉えることで, 様々な先行研究で定義づけられた多様な知恵の概念を「知恵」というひとつの体系として包括的に理解

することが可能になると考えられる。

知恵の測定方法

以上では, 「知恵のある」状態の定義に言及してきた。それでは, 実証的に「知恵」に言及する場合, 「知恵のある人」をどのように探し出せばよいのだろうか。その際, 「知恵のある」状態と「そうでない」状態は, どのようにして区別されるのだろうか。以下では, 知恵の測定法に関する先行研究を概観する中で, 「知恵のある」状態がどのように扱われてきたかということに言及する。

知恵の測定法に関する先行研究

知恵の実証的な測定方法を最初に発表したのは, Baltes を筆頭とするベルリン・グループであった。彼らは, 前述の通り知識を基盤とした知恵の理論を提唱し, 客観的に観察可能なパフォーマンスに基づく知恵の測定法を提案した (Staudinger, Smith, & Baltes, 1994)。彼らは知恵の反映された行動が見られやすい場面として人生計画場面と人生回顧場面を設定した。そこでは, 例えば「15歳の少女がいますぐ結婚したがっています。彼女はどのように考え, どのように行動すべきでしょうか」(人生計画場面) というような課題が使用される。対象者には, 課題を読んで考えたことをすべて言葉に出すよう求め, 研究者が対象者の持つ知恵の程度を, 知恵に関する5つの基準(宣言的知識, 手続き的知識, 文脈理解, 価値相対性の理解, 不確実性の理解)に基づいて評定するのである。この方法は高い評価を受け (Sternberg, 1998), 日本でも高山・下仲・中里・権藤 (2000) によって課題とマニュアルの日本語版が作成された。その中で高山らは, 60~86歳の197名を対象として調査を実施し, 信頼性と基準関連妥当性の検討を行った。その結果, 高い評定者間信頼性が確認され³, 知能・日常的知能・教育年数を外部基

³ ただし, 高山ら (2000) では訓練された大学院生2名で評定しているのに対し, ベルリン・グループ (Smith & Baltes, 1990 など) では, 難解な人生の問題に関する評定を行うことから, 対人援助の専門家を抽出して訓練を行い, 評定させている。こうした評定方法の違いについては議論の余地があり得る。

準とした基準関連妥当性の検討からは、人生計画場面において十分な妥当性が、人生回顧場面においても妥当性が示唆される根拠がいくつか見られたことを報告している。

一方、最近では、より手軽に実施できる知恵の査定方法として、自己評定式の尺度が開発されている。Ardelt (2003) は、Clayton & Birren (1980) をもとに、知恵を認知・内省・感情の3側面から構成されるものと考え、自己評定式の尺度である39項目の3D-WS (Three Dimension Wisdom Scale) を開発した。このうち認知的側面は、真実を理解したいという継続的な欲求にもとづく側面で、「私は解決方法がないと思われるような問題にはほとんど興味が持てない」などの14項目から構成されている。内省的側面は、複数の観点を持つことのできる能力に着目しており、「私はいつも、問題のすべての側面を見るよう心掛けている」などの12項目から構成される。さらに感情的側面は、他者に対する同情的な思いやりのある慈愛の心に着目したものであり、「時々、私はすべての人々に対して思いやりを感じることもある」というような13項目により構成される。

Ardelt が3D-WSを公表したのとほとんど同じ時期に、Webster (2003) も、自己評価尺度の必要性を指摘し、先行研究のレビューから知恵に関わる要素を抽出して、40項目から成る自記式知恵尺度 (Self-Assessed Wisdom Scale; SAWS) を作成している。この尺度は、人生経験 (「私は人生における数々の苦難を乗り越えてきている」など8項目)、感情制御 (「私は自分自身の微妙な感情に気付くことが得意だ」など8項目)、回想・内省 (「自分の過去について思い返すことで、現在の関心事に関する知見を得ることができる」など8項目)、ユーモア (「私は人生の大きな節目に対処するとき、面白みのある側面を見つけようとする」など8項目)、開放性 (「私は、周囲にいる自分と異なる人々のことが好きだ」など8項目) という、知恵に関わる5つの要素を含んでいる。

Table 2 に示すように、他にも、尺度やインタビューなどの方法を用いた知恵を測定するための取り組みが行われている (Levenson, Jennings, Aldwin, & Shiraishi, 2005; Mickler & Staudinger, 2008; Perry,

Komro, Jones, Munson, Williams, & Jason, 2002; Wink & Helson, 1997)。なかでも、上で紹介したArdeltやWebsterによる尺度は、手軽に知恵を測定できる先駆的な方法として近年注目を集め、尺度間の比較なども行われている (Ardelt, 2011; Glück, König, Naschenweng, Redzanowski, Dorner, Straßer & Wiedermann, 2013)。しかし、今のところ、共通して使われる尺度や測定法は存在していない (Glück et al, 2013)。また、これらの尺度や測定法同士の相関が低い傾向にあることも知られており (Ardelt, 2011; Glück et al., 2013)、様々な実証研究における結果の違いは、どの尺度・測定法を使うかに依存することが指摘されている (Glück et al., 2013; Redzanowski & Glück, 2012)。

測定方法における知恵の連続性

これらの尺度や測定法は、知恵の有無ではなく、知恵の量を測定するものであり、何点以上ならば知恵があると評価するためのものではない。実際、いずれの研究でも、知恵得点の程度と、幸福感 (Bergsma & Ardelt, 2012) や精神的健康 (Webster et al., 2014)、人生満足感 (Mickler & Staudinger, 2008)、パーソナリティ (Staudinger, Maciel, Smith, & Baltes, 1998; Webster et al., 2014) などの変数との関連を調べるとこのような使い方がされている。

また、知恵の高低で群分けしてインタビュー調査が行われることもある。Ardelt (2005) は、知恵と人生経験の関係を調べるインタビュー調査をする際に、3D-WSを用いて、認知・内省・感情の3次元すべての得点が低い群、平均的な群、高い群から各10名を抽出した。しかしここでも知恵の有無を区別する意図はなく、知恵得点の高さと人生経験の内容を照合するにとどまっている。以上より、測定法の研究において、知恵は「有るか無しか」という非連続的なものではなく、「どの程度有しているのか」という連続的なものとして扱われてきていることが分かる。

知恵の発達

前項では、知恵の測定方法に関する研究を概観した。その中で、知恵の定義が研究者間で共有されて

Table 2 測定方法の種類

著者名	刊行年	名称	内容	構成要素
インタビュー形式				
Staudinger, Smith, & Baltes	1994	Berlin wisdom paradigm	人生における困難な問題を含む課題を提示し、対象者に、課題を読んで考えたことをすべて言葉に出すよう求める。研究者が対象者の持つ知恵の程度を、知恵に関わる5つの基準をもとに評定して得点を出す。	宣言的知識、手続的知識、文脈理解、価値相対性の理解、不確実性の理解
Micklar & Staudinger	2008	Personal wisdom task	対象者に、友人目線で自分自身のことを話してもらうよう指示し、普段の行動や問題解決の仕方、長所・短所などに関する質問に対して、考えたことをすべて言葉に出すよう求める。評定者が対象者の持つ知恵の程度を、個人的知恵に関わる5つの基準をもとに評定して得点を出す。	自分についての知識、成長と自己調整、自分と関係する他者についての知識、自分自身に関する相対主義的理解、曖昧さへの寛容
質問紙形式				
Perry, Komro, Jones, Munson, Williams, & Jason	2002	Adolescent wisdom scale (AWS)	青年期用の知恵測定尺度。23項目の質問に対し、5件法での自己評価を求める。	知性、調和・ぬくもり、スピリチュアリティ
Ardelt	2003	Three-Dimensional wisdom scale (3D-WS)	39項目の質問に対し、5件法での自己評価を求める。	認知、内省、感情
Webster	2003	Self Assessed Wisdom Scale (SAWS)	40項目の質問に対し、6件法での自己評価を求める。	人生経験、感情制御、回想・内省、ユーモア、開放性
Levenson, Jennings, Aldwin, & Shiraishi	2005	Adult Self-Transcendence Inventory	18項目の質問に対し、5年前と比較した場合にどうかを考えさせ、4件法での自己評価を求める。	疎外感、自己超越
複合形式				
Wink & Helson	1997	Practical wisdom scale (PWS) & Rating of Transcendent Wisdom (TWR)	PWSでは、対象者に自分自身を表現させ、知恵に関わる形容詞（+知恵の構成要素にはなり得ない要素）がいくつか含まれていたかを数えて得点を出す。TWRでは、知恵の例を自由記述するよう対象者に求め、評定者が5件法で評定する。	実践的知恵（共感性、理解力など）、超越的知恵（自己超越、知識の限界についての認識、哲学／精神性への傾倒）

いないために測定法は様々だが、いずれの尺度・測定法も、知恵が「ある」か「ない」かを調べるためのものではなく、「どの程度知恵を有しているか」ということを測っているのだということ述べた。

測定に関する研究では、「知恵がある人」と「そうでない人」という個体間の違いをどのように識別するかということに着目していた。しかし、もともとから知恵をもって生まれてくる人がいるわけではなく、生きていく中で高められるものであるとする考え方が一般的である。Meacham (1990) が主張するように、知恵が加齢に伴って失われていくものであると考え、知恵のある高齢者は若い頃から知恵を保ってきたのだと解釈する立場もあるが、多くの研究者は、知恵が人生の比較的遅い時期になって高められるものであると考え、知恵の発達に関する研究を行っている。

知恵が高まっていくものであると考え、個人の中でも「知恵があるとは言えない」状態から「知

恵がある」状態へと移行する可能性があることが想定される。そこで以下では、知恵の発達に関する見解を概観し、その中で「知恵がある」状態がどのように理解されてきているのかについて述べる。

加齢と知恵

本稿の最初に、知恵は人生の後半期にあらわれるポジティブな能力・態度として認識されてきたことを述べたが、一般的にも、知恵というのは年とともに、あるいは人生経験を積み重ねる中で培われるものと考えられる傾向にあり、知恵と関係する要素を一般の人々に尋ねると、しばしば「年齢」や「経験」という回答がみられる (Clayton & Birren, 1980; Sternberg, 1985 など)。

知恵の発達に注目した研究でも、まずは知恵と年齢に注目した実証的な研究が行われた。その結果、知恵は必ずしも年齢に伴って発達しないという可能性が示された (Smith & Baltes, 1990)。年齢と知恵の

関連に言及した先行研究を分類すると、年齢群間で有意な知恵得点の差が見られなかったとする結果、中年群の知恵得点が有意に高かったとする結果、高齢群の知恵得点が有意に高かったとする結果の3種類があり、以下に概観する。

ベルリン・グループは、彼ら自身の開発した観察可能なパフォーマンスに基づく測定法を用いて、青年から高齢者までを対象として知恵を測定し、知恵に関わる知識の量について、年齢による有意な違いが見られなかったことを示した (Baltes, Staudinger, Maercker, & Smith, 1995; Staudinger, 1999)。また Baltes & Staudinger (2000) は、彼らのグループが行った一連の研究を再分析する中で、より高いパフォーマンスをするのが60代であったことを報告した。さらに高山 (2002, 2005) も、成人・前期高齢者・後期高齢者を対象として、ベルリン・グループと同様の測定法を用いて知恵を測定し、知恵と年齢に関する検討を行った。その結果、知恵の得点に有意な年齢差が認められなかったことを報告している (高山, 2009 による)。

また、Webster et al. (2014) は、17歳~92歳を対象として調査を行った結果、総合的にみて中年群の知恵得点が有意に高かったとする結果を示している。彼は、彼自身が開発した自記式の知恵尺度であるSAWSを用いて知恵を測定し、総合得点だけでなく、知恵の下位項目ごとの結果も明らかにした。それによれば、「人生経験」に関しては高齢であるほど得点が高い傾向にあった。また「感情制御」や「経験への開放性」、「ユーモア」に関しては、中年の得点が最も高く、また青年よりも高齢者のほうが、得点が低かった。さらに「回想・内省」については、年齢差が見られなかった。

その一方で、前述の通り知恵をより包括的な力であると考えた Takahashi & Overton (2002) は、日米の中年と高齢者 (中年: 36歳~59歳, 高齢者: 65歳以上) を対象として知恵を測定した。その結果、いずれの国においても、中年より高齢者のほうが、知恵の得点が高かったことが明らかになった。

このように先行研究で結果が一致しない理由として、知恵のどの側面をどのように測定するかによっ

て、年齢との関連の仕方は異なる可能性があることが指摘されている (Glück et al., 2013; Redzanowski & Glück, 2012; 高山, 2009)。したがって、年齢との間に有意な相関がない知恵の側面もあるということ、つまり、高齢であるほど高い水準に達している側面ばかりではないことが推察される。

知恵の発達を理解するための枠組み

年齢と知恵に関する研究は、いずれも相関関係に着目しており、年齢が知恵を高めるという因果関係は想定されていなかった。それでは、知恵はどのようにして発達するものと考えられているのだろうか。以下では、知恵の発達に関するいくつかの枠組みを示す。

人生経験との関係に着目した見解 上記の通り、知恵と年齢が必ずしも相関しないという実証研究の影響もあり、年齢よりもむしろ、知恵と人生経験、とくに危機的なライフイベントとの関係が注目される傾向にある (e.g. Ardelt, 2005; Glück & Bluck, 2013; Staudinger & Mickler, 2005; Yang, 2014)。

Glück & Bluck (2013) は、知恵の発達について論じるために、経験に対する態度に注目した。彼女らは知恵があるとして推薦された人々の人生経験に関する語りをもとに、知恵の発達モデルとしてMOREモデルを提唱した。MOREとは、達成感 (Sense of Mastery; M)、開放性 (Openness; O)、内省力 (Reflectivity; R)、感情制御・共感性 (Emotion regulation/ Empathy; E) の略であり、彼女らはこれらが知恵発達の資源 (resource) であると考えた。

Baltesの共同研究者であったStaudingerらも、ライフイベントの経験の仕方に注目して知恵の発達を説明している。彼女らは、人生について熟考する際の社会・認知的な過程が知恵の発達に重要な意味をもつと考え、知恵の社会認知的な発達モデルを示した (Staudinger & Mickler, 2005)。それによれば、①個人的な要因 (知能, 創造性, 経験に対する開放性, 社会的な能力, 感情制御能力, 道徳的な価値観, 自尊心など)、②特定の専門知識固有の要因 (人生あるいは自分自身について理解することに関する強いモチベーション, 難解な生活状況への取り組み, メンタ

一による指導など), ③経験的な文脈の要因 (特定の専門的職業経験, 歴史的な文脈など) の3つの要因が, 個人が経験する出来事の内容だけでなく, 経験の仕方にも影響するのだという。

心理構造の発達に着目した見解 知恵の発達を理解するための枠組みとして, 人生経験よりもむしろ, 心理構造の発達に注目する立場もある。新ピアジェ派の Kramer (1990) は, 認知的な発達 (相対主義的, 弁証法的思考) と感情的な発達 (感情制御, 自我の発達, 意識と無意識の統合) が相互に関わり合う中で知恵が形成され, 様々な場面で知恵を使うことができるようになると考え, 知恵モデルを提唱した。このモデルは, 認知・感情の発達に伴って高められた知恵を使うことで, 様々な課題や生活上のストレスの解決・解消が可能となり, それによってさらに認知や感情の発達が促進されるという循環モデルの形をとっている。つまり彼女によれば, 知恵は個人と環境の相互作用の中で, たえず変化し, 発達していくのである。

また, 上述の Takahashi & Overton (2002, 2005) の包括的知恵発達理論も, 知恵の発達を想定した理論である。彼らは, 実利的な機能に注目する分析的側面については知識量の増加や情報処理機能の複雑化などの量的変化が起こるものと考えたが, 特に強調されたのは, むしろ, 総合的側面における発達の性質であった。彼らは発達における弁証法的現象 (心のシステムや構造が, 発達とともにより高度な統合性をもつという現象) の特色に着目し, 総合的側面には経験に対する2つのモード, つまり「変容性 (synthetic/ transformational)」と「統合性 (synthetic/ integrative)」があるとした。「変容性」は, 自己やその場の状況的文脈から一定の距離を置いた高い意識レベルで経験について熟考するものであり, 具体的な水準では「内省的理解 (reflective understanding)」として定義される。この内省的理解は, 新ピアジェ派 (Adams, Labouvie-Vief, Hobart, & Dorosz, 1990) や様相論理 (modal logic; Chinen, 1984) の立場などにおいても触れられているところであり, ものごとを変容していこうとする心理的な性質であると言える。例えば Erikson, Erikson & Kivnick (1986) は, 70代

～90代までの対象者から得た報告の中で, 他者 (祖父母や両親, 同年代の人々) とのやり取りの中で得た経験を, 高齢期における自分の生き方の指針としている高齢者たちの存在を示唆している。その対象者たちは, 過去の経験を, 相手の立場や考えを想像したり, その状況における整合性などを考察したりすることで, 現在の自分の行動に反映させていた。このように, 何か出来事を経験した際に, その出来事を, 自分がどのように経験したかということも含めて新たな一段高い見地から内省理解・考察するような心の働きが, Takahashi らのいう知恵の総合的側面における「変容性」であるといえる。一方「統合性」は, 人間の意識の様々なモードを調整するものとして理解された。彼らはこの統合性に関して Erikson の理論を参考にしている。上述の通り, Erikson (1982) は知恵を「死そのものに向き合う中で, 生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」と定義しているが, それは「心と体の統合が崩壊に脅かされながら, 何らかの秩序と意味を維持する過程」であり (Erikson & Erikson, 1997), ものごと全体をひとつにまとめる統合性を意味している。例えば Erikson et al. (1986) は, 上記と同様の70代～90代による報告の中で, 多くの対象者が, 過去を振り返ったときに「起こったことや行ったことについて後悔はない」と発言したことを報告している。しかし実際には, 彼らの多くが, 若いころに不幸や不安を経験していたのだという。こうした現在の評価と過去の経験の間の矛盾について, Erikson らは, かつては苦しい経験であった出来事や環境がライフサイクル全体の一部として統合され, 新しい意味を持つようになったのではないかと考察している。このような, 過去の出来事を振り返り, 認知や感情を含む精神的な均衡を保ちながら様々な経験を意味づけようとするような心の働きが, Takahashi らのいう「統合性」にあたる。統合性は高齢期のみならず, 人生の各段階において, 弁証法的に葛藤を統合する中で漸進的に発達してきているものであり (Erikson & Erikson, 1997), 発達の原動力となる性質をもちながら, それ自体も成熟すると考えられている。つまり Takahashi らは, こうした「変容性」や「統合性」という心理的な性質を知恵に含まれるものと考え, 人

生を通じて様々な出来事を経験しながら培われていくものと考えているのである。

知恵発達の枠組みに関する包括的見解

上記の通り、知恵の発達を理解するための枠組みには2つの観点があると考えられる。Glück & Bluck (2013) や Staudinger & Mickler (2005) が主張するのは人生における出来事や環境の影響を重視した見解であり、Kramer (1990) や Takahashi & Overton (2002, 2005) が主張するのは心理構造の発達に重点を置いたものであった。

この2つの立場は、「知恵」の定義の中に発達に関わる心理構造を含んでいるか否かという点で、明確に異なっている。しかし知恵の発達過程の理解に関しては、両者の間に大きな矛盾はないとも考えられる。上で述べた機能的側面と構造的側面の枠組みに当てはめると、知恵の発達を説明するために人生経験を重視する立場は「機能的側面」のみに着目した見解であり、心理構造の発達に重点を置いた立場は「構造的側面」に着目した見解であると考えられる。例えば Glück & Bluck (2013) は、人々が危機的な出来事を経験し、その経験に対して特定の態度をもって取り組むことで、知恵の発達が促されると考えた。彼女らが主張する MORE モデルでは、Ardelt (1997) や Clayton & Birren (1980) が知恵の構成要素として位置付け、Takahashi & Overton (2002) が発達の性質を持つ「総合的側面」にあたる要素として位置付けた「内省力」や「感情制御・共感性」などが、知恵を発達させる要因であるとみなされている。つまり Glück らは機能的側面に注目して知恵を定義しているために、「内省力」や「感情制御・共感性」を知恵の要素として含めていないものの、それらが知恵の発達に影響すると考えている点では、2つの見解は同じであるといえよう。

また、心理構造（構造的側面）の発達に着目した見解も、経験を無視しているわけではない。Kramer (1990) は、認知（相対主義的思考、弁証法的思考）と感情（感情制御、自我の発達、意識と無意識の統合）の発達を前提として知恵モデルを提案しているが、成人期の課題や危機を経験し、それを克服する中で、さらに認知・感情の発達が促されると考えて

いる。また Takahashi & Overton (2002) も、総合的側面の発達性について論じる際に、経験をもとに心理構造を変容・統合する心的作用に言及していることから、いずれの見解においても、人生経験は知恵発達の重要な要素としてとらえられていることがわかる。

以上より、2つの立場は、人生経験に対してどのように取り組むかという心理構造が「知恵」の構成要素として含まれるか否かという、知恵の定義の面で異なっていた。しかし、そうした人生経験に取り組む際の心理構造が知恵の発達を説明する際に重要な意味を持つという点では共通していることが分かった。

心理構造の発達過程における非連続性

前項では、知恵の発達に関する枠組みについて概観し、いずれの立場においても、人生経験に取り組む際の心理構造（本稿では知恵の構造的側面）が重要な意味を持つと考えられていることが分かった。そこで以下では、上記した4つの枠組みのいくつかに通じて見られた、物事に対する認識・理解の仕方（弁証法的・内省的な理解）と物事を統合する性質（統合性や感情制御）に関わる心理構造の発達の变化に言及した研究を概観する。

内省的理解の変容 Chinen (1984) は、様相論理の立場から、経験に対する意識に注目し、対象意識 (object awareness) と様相意識 (modal awareness) の違いを説明している。

対象意識は、物体や経験の内容に注目するものである。例えば彫像を見ている時、その素材や形、空白の使い方など、彫像自体に焦点を当てるのが対象意識である。一方、様相意識は、物体や経験それ自体だけでなく、経験の仕方に注目する。彫像を見る例でいうと、彫像それ自体だけでなく、歴史的価値を持っているか否かを考えたり、ダイナミックな構成に感動したり、重量感を感じたりするなど、「彫像を見る」という経験の仕方に焦点を当てるのが様相意識である。

Chinen (1984) によれば、「知恵のある」高齢者は、様相意識を特徴としているのだという。彼は「知恵

のある (wise)」「高齢者と「後退した (regressed)」高齢者を明確に区別しており、両者の間には、経験に対する意識において質的な違いがあると考えている。

統合性の変容 本稿の冒頭で述べたように、Erikson (1982) は、漸成的な人間発達の最終段階に関わる力として「知恵」を想定していた。彼は生涯発達の観点から、人生を乳児期から高齢期までの 8 段階に分け、各段階においてみられる顕著な葛藤を克服する中で、人間的な強さが生じると考えた。そして、その 8 段階目にあたる高齢期の課題が統合性対絶望であり、この葛藤を克服する中で生じるものが「知恵」であった。彼の言う知恵が、ものごと全体をひとつにまとめる「統合性」を意味していることは前述の通りである。また Erikson は、統合性の中でも、特に感情の統合を重視していた。つまり、高齢期の葛藤を克服する中で、感情を制御 (統合) する能力が生じることが想定されていたと考えられる。

感情制御能力の変容 感情制御に関しては、新ピアジェ派の Labouvie-Vief (1990) も言及している。彼女によれば、青年期までは主観的態度 (mythos; 感情など) が抑制され、客観的態度 (logos; 認知機能など) が高められる傾向にあるが、一度 logos が高

められたら発達目標が変更されて、主観的態度と客観的態度の統合に向かうようになり、それによって、感情的な経験を深く理解し、統制できるようになるのだという。つまり、経験に対する態度の質的な変化により、感情の制御が可能になることを指摘していると言えるだろう。

以上より、知恵の発達に関わる心理構造 (構造的側面) の発達の变化についての見解を概観すると、知識・経験に対する態度や意識の内容において質的な変化が想定されており、「知恵がある (高い)」状態と「そうでない (低い)」状態が、質的に異なる非連続的なものとして理解されてきていることが分かる。

総合考察

本稿では、定義、測定法、発達の 3 つに関する研究を概観し、「知恵のある」状態が心理学の研究の中でどのように扱われてきたかということに言及してきた (Figure 1)。ここでは、心理学の分野において「知恵のある」状態をどのように理解し、研究を重ねていくべきかについての一見解を示す。

「知恵」の定義の包括的理解

先行研究に見られる知恵の概念をより包括的に理

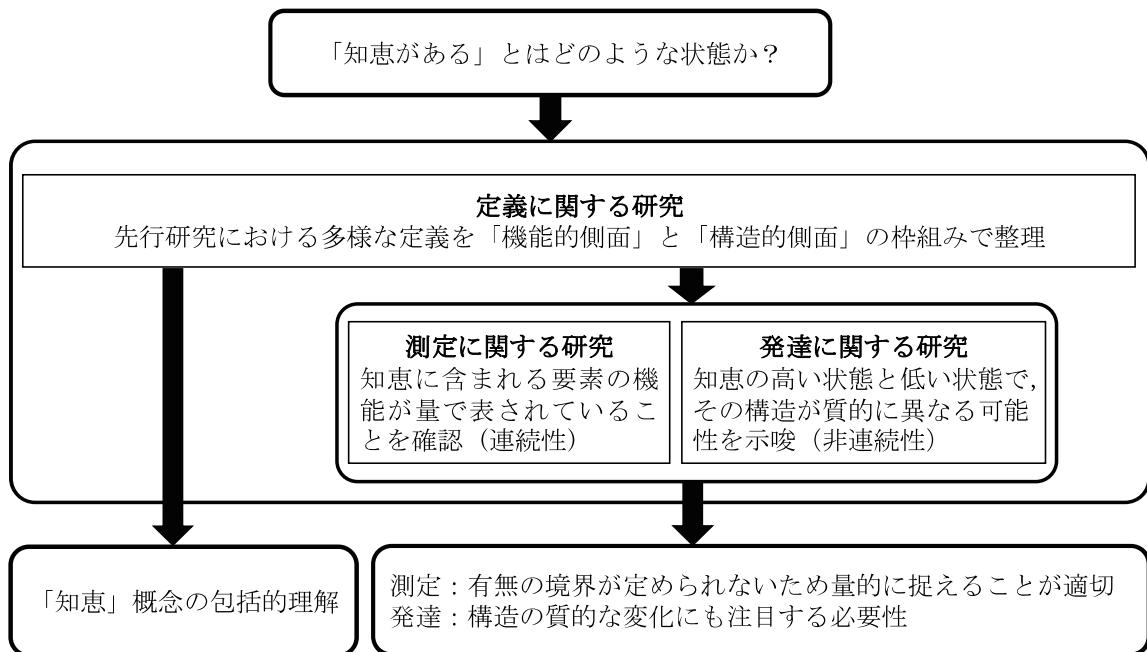


Figure 1 本稿の概要

解するために、これまで知恵の要素 (Ardelt, 1997; 高山, 2009 など) が注目されてきた。例えばベルリン・グループは、知恵を人生の意味と行動についての専門的な知識である (Baltes & Smith, 1990) と定義した。これに対し、Ardelt (1997) は、感情的側面を無視していると批判し、Clayton & Birren (1980) を継承して、知恵とは認知・内省・感情を統合する力であると考えた。

しかし、ベルリン・グループが知識や知識の使い方という知恵の機能に注目しているのに対し、Ardelt (1997) は認知・内省・感情といった知恵に関わる心理構造に着目していることから、両者の間で観点が異なっていることが分かる。本稿はこうした2つの観点を統合し、数ある知恵の概念研究を、問題に取り組む際に用いられる資源に言及した「機能的側面」に注目するものと、より包括的に心理構造に働きかける発達の性質に言及した「構造的側面」に注目するものとに分類して、知恵の概念を総合的に理解するための枠組みを示した点で意義があると考えられる。

さらにこのことは、知恵の測定方法を考える際にも応用できる可能性がある。機能と構造の2側面に分けて知恵を捉えると、知識や情報処理能力のような、テストの得点やパフォーマンスの観察に基づいて直接的にその能力や様相を把握することができるもの (機能的側面) と、内省力や感情制御能力のような、直接的に把握しにくく、個人の内観報告によらなければならないようなもの (構造的側面) があることが分かる。こうした各側面の性質に応じた方法でテストバッテリーを組むことで、個人が有している知恵の量を、より包括的に捉えることが可能となるだろう。

知恵の連続性と非連続性

一般的には、「知恵のある人」などのように、知恵は「ある」「なし」の2値 (非連続) で表現される。このことは、「知恵のある人」が、他の人と質的に異なる特質を持っていると考えられていることを意味している。

しかし測定文脈においては、知恵の有無ではな

く、「どの程度有しているのか」という連続的なものとして扱われてきた。そのひとつの理由としては、「知恵がある」状態でも「そうでない」状態でも、基本的に同じ要素を有していることが前提とされているためであると考えられる。例えば人間は基本的に、量的な個人差はあるものの、知識や情報処理能力を有している (機能的側面)。また、過去の出来事について考えたり、感情を調整したりするという心的作業も、知恵の有無や高低にかかわらず、誰もがやっていることである (構造的側面)。つまり、「知恵がある」状態と「そうでない」状態の違いは、知恵に関わる各要素の量や従事度によるものであると解釈できる。個人の知恵を測定する際には、そうした各要素の量や従事度を捉えることに重点が置かれるため、連続的なデータとして取得されるのだと考えられる。

このように連続量として知恵を測定する場合、どこまでが知恵の「ある」状態、どこまでが「ない」状態なのか、明確な境界を定めることは難しい。知恵を測定し、高低で群分けすることは可能であるとされるものの、それが一般的に表現されるような知恵の有無を意味しているわけではないことに注意する必要があるだろう。ただし、「知恵がある」とみなされるような人が常に知恵のある賢明なふるまいをするわけではない (Yang, 2013) という指摘を踏まえると、個人を「知恵のある人」として同定するのではなく、個人における知恵の高低を測定する方が適切であると考えられる。

一方、知恵の発達に関わる要素 (構造的側面) の発達過程をみると、各要素の構造が、「知恵があるとはいえない」状態から「知恵がある」状態にかけて質的に変容する可能性が示唆されている。つまり、測定の際には、各要素の機能を測るため連続的なものとして示されるものの、その構造は「知恵が高い」と示された人と「知恵が低い」と示された人とで質的に異なっている可能性があると言える。これは、知恵を連続的なものとして測定することを否定するものではないが、知恵の高低の基底に、構造の質的な違いが存在しているのではないかという示唆を含んでいる。したがって、測定の際には連続的なもの

として扱うことが有効であると考えられるものの、知恵の発達に言及する際には、各要素における機能の合計値の高低と諸要因との関連や、知恵得点の高い人の経験的側面に注目するだけでなく、そうした構造の質的な変化も併せて論じていく必要があるのではないだろうか。

おわりに

知恵は、成人期以降にあらわれるポジティブな能力・態度のひとつとして位置付けられ、高齢期をより幸福に過ごすために貢献し得る能力のひとつであると考えられてきた。しかし、知恵のポジティブな側面への言及の多さに反し、知恵が心理学の分野で研究されるようになって30年以上経過した現在も、その概念に関する共通の認識は確立されておらず、いまだ十分にその実態が把握されていないのが現状である。

そのような状況の中、本稿では、何をもって「知恵がある」といえるのかについて、定義、測定、発達の3つの観点から検討してきた。しかしながら、その答えはいまだ不明確であると言わざるを得ない。ただし、常に知恵のある行動をとることのできる人がいるかどうかという疑問 (Yang, 2013) があるように、心理学的な研究においては、個人における知恵の有無を区別すること自体が不要である可能性がある。それよりもむしろ、「知恵のある」評価と「そうでない」評価を分ける境界に注目するほうが、知恵という概念の範囲をより詳細に探求するうえで意味であるとも考えられる。今後も、こうした議論を含め、より包括的な観点から実証研究を重ねていく必要があるだろう。

引用文献

Adams, C., Labouvie-Vief, G., Hobart, C. J., & Dorosz, M. (1990). Adult age group differences in story recall style. *Journal of Gerontology, 45*, 17-27.

Ardelt, M. (1997). Wisdom and life satisfaction in old age. *Journal of Gerontology, 52*, 15-27.

Ardelt, M. (2003). Empirical assessment of a

three-dimensional wisdom scale. *Research on Aging, 25* (3), 275-324.

Ardelt, M. (2005). How wise people cope with crises and obstacles in life. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation, 28* (1), 7-19.

Ardelt, M. (2011). The measurement of wisdom: A commentary on Taylor, Bates, and Webster's comparison of the SAWS and 3D-WS. *Experimental Aging Research, 37*, 241-255.

Arlin, P. K. (1990). Wisdom: The art of problem solving. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 230-243, New York: Cambridge University Press.

Baltes, P. B., & Smith, J. (1990). Toward a psychology of wisdom and its ontogenesis. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 87-120, New York: Cambridge University Press.

Baltes, P. B., Staudinger, U. M., Maercker, A., & Smith, J. (1995). People nominated as wise: A comparative study of wisdom-related knowledge. *Psychology and Aging, 10*, 155-166.

Baltes, P. B., & Staudinger, U. M. (2000). Wisdom: A metaheuristic (pragmatic) to orchestrate mind and virtue toward excellence. *American Psychologist, 55*, 122-136.

Bergsma, A. & Ardelt, M. (2012). Self-reported wisdom and happiness: An empirical investigation. *Journal of Happiness Studies, 13* (3), 481-499.

Chinen, A. B. (1984). Modal logic: A new paradigm of development and late-life potential. *Human Development, 27*, 42-56.

Chinen, A. B. (1987). Fairy tales and psychological development in late life: A cross-cultural hermeneutic study. *Gerontologist, 27* (3), 340-346.

Clayton, V. P. (1975). Erikson's theory of human development as it applies to the aged: wisdom as contradictory cognition. *Human Development, 18*, 119-128.

Clayton, V. P., & Birren, J. E. (1980). The development of wisdom across the life span: A re-examination of an ancient topic. In Baltes, P. B. & Brim, O. G. (Eds.),

- Life-span development and behavior*, 3, 103-135, New York: Academic Press.
- Crenshaw, J. (1976). *Studies in ancient Israeli wisdom*. New York: Klave Publishing House.
- Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed*. New York: W.W. Norton.
- Erikson, E. H. & Erikson J. M. (1997). *The life cycle completed* (Extended Version). New York: W.W. Norton.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age: The experience of old age in our time*. New York: W.W. Norton.
- Glück, J., & Bluck, S. (2013). The MORE life experience model: A theory of the development of personal wisdom. In Ferrari, M. & Weststrate, N. M. (Eds.), *The Scientific study of personal wisdom: From contemplative traditions to neuroscience*, 75-97, New York: Springer.
- Glück, J., König, S., Naschenweng, K., Redzanowski, U., Dorner, L., Straßer, I., & Wiedermann, W. (2013). How to measure wisdom: content, reliability, and validity of five measures. *Frontiers in Psychology*, 4 (405), 1-13. doi: 10.3389/fpsyg.2013.00405
- Hall, G. S. (1922). *Senescence: The last half of life*, New York: Appleton.
- Kitchener, R. S., & Brenner, H. G. (1990). Wisdom and reflective judgement: Knowing in the face of uncertainty. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 212-229, New York: Cambridge University Press.
- Kramer, D. A. (1990). Conceptualizing wisdom: the primacy of affect-cognition relations. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 279-316, New York: Cambridge University Press.
- Kramer, D. A. (2000). Wisdom as a classical source of human strength: Conceptualization and empirical inquiry. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19(1), 83-101.
- Labouvie-Vief, G. (1990). Wisdom as integrated thought: Historical and development perspectives. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 52-86, New York: Cambridge University Press.
- Levenson, M. R., Jennings, P. A., Aldwin, C. M., & Shiraishi, R. W. (2005). Self-transcendence: Conceptualization and measurement, *International Journal of Aging and Human Development*, 60 (2), 127-143.
- McKee, P., & Barber, C. (1999). On defining wisdom. *International Journal of Aging and Human Development*, 49, 149-164.
- Meacham, J. A. (1990). The loss of wisdom. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 181-211, New York: Cambridge University Press.
- Mickler, C., & Staudinger, U. M. (2008). Personal wisdom: Validation and age-related differences of a performance measure. *Psychology and Aging*, 23, 787-799.
- 総務省統計局 (2016). 統計トピックス No.90 統計からみた我が国の高齢者 (65 歳以上) — 「敬老の日」にちなんで — Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi900.htm> (2016 年 9 月 30 日).
- Orwoll, L. & Perlmutter, M. (1990). The study of wise persons: Integrating a personality perspective. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 160-177, Cambridge University Press, New York.
- Pascual-Leone J. (1990). An essay on wisdom: Toward organismic processes that make it possible. In Sternberg, R. J. (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*, 224-278, New York: Cambridge University Press.
- Perry, C. L., Komro, K. A., Jones, R. M., Munson, K., Williams, C. L., & Jason, L. (2002). The measurement of wisdom and its relationship to adolescent substance use and problem behaviors. *Journal of Child & Adolescent Substance Abuse*, 12,

- 45-63.
- Redzanowski, U. & Glück, J. (2012). Who knows who is wise? Self and peer ratings of wisdom. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 68 (3). doi:10.1093/geronb/gbs079
- Smith, J., Baltes, P. B. (1990). A study of wisdom-related knowledge: Age/cohort differences in responses to life planning problems. *Developmental Psychology*, 26, 494-505.
- Smith, J., Staudinger, U. M., & Baltes, P. B. (1994). Occupational settings facilitating wisdom-related knowledge: The sample case of clinical psychologists. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62 (5), 989-999.
- Staudinger, U. M. (1999). Older and wiser?: Integrating results on the relationship between age and wisdom-related performance. *International Journal of Behavioral Development*, 23 (3), 641-664.
- Staudinger, U. M., Lopez, D., & Baltes, P. B. (1997). The psychometric location of wisdom-related performance: Intelligence, personality, and more? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1200-1214.
- Staudinger, U. M., Maciel, A. G., Smith, J., & Baltes, P. B. (1998). What predicts wisdom-related performance? A first look at personality, intelligence, and facilitative experiential contexts. *European Journal of Personality*, 12, 1-17.
- Staudinger, V. M., & Mickler, C. (2005). Wisdom and personality. In Sternberg, R. J. & Jordan, J. (Eds.), *A Handbook of wisdom: Psychological perspectives*, 191-219, New York: Cambridge University Press.
- Staudinger, U. M., Smith, J., & Baltes, P. B. (1994). *Manual for the assessment of wisdom-related knowledge*. Berlin: Max Planck Institute for Human Development.
- Sternberg, R. J. (1985). Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 607-627.
- Sternberg, R. J. (1998). A balance theory of wisdom. *Review of General Psychology*, 2, 347-365.
- Takahashi, M. (2000). Toward a culturally inclusive understanding of wisdom: Historical roots in the East and West. *International Journal of Aging and Human Development*, 51 (3), 217-230.
- Takahashi, M. (2013). Wisdom of the East and West: A relational developmental systems perspective. In Ferrari, M. & Westrate, N. (Eds.), *The scientific study of personal wisdom*, 251-263, New York: Springer.
- Takahashi, M. (2015). 「叡智」研究の動向と新しいパラダイム 老年社会科学, 37 (3), 325-333.
- Takahashi, M., & Bordia, P. (2000). The concept of wisdom: A cross-cultural comparison. *International Journal of Psychology*, 35 (1), 1-9.
- Takahashi, M., & Overton, W. F. (2002). Wisdom: A culturally inclusive developmental perspective. *International Journal of Behavioral Development*, 26, 269-277.
- Takahashi M, Overton W. F. (2005). Cultural foundations of wisdom: An integrated developmental approach. In Sternberg, R. J. & Jordan, J. (Eds.), *A Handbook of wisdom: Psychological perspectives*, 32-60, New York: Cambridge University Press.
- 高山 緑 (2002). 知恵の加齢変化と心理社会的要因に関する心理学的研究 東京大学博士学位論文 (高山, 2009 の引用による) .
- Takayama, M. (2005, August). Age/cohort differences and gender differences in wisdom. Poster presented at the 113th Annual Convention of the American Psychological Association, Washington, D. C. (高山, 2009 の引用による) .
- 高山 緑 (2009). 知恵—認知過程と感情過程の統合心理学評論, 52 (3), 343-358.
- 高山 緑・下仲 順子・中里 克治・権藤 恭之 (2000). 知恵の測定法の日本語版に関する信頼性と妥当性の検討 : Baltes の人生計画課題と人生回顧課題を用いて 性格心理学研究, 9, 22-35.
- Webster, J. D. (2003). An exploratory analysis of a self-assessed wisdom scale. *Journal of Adult Development*, 10 (1), 13-22.
- Webster, J. D. (2010). Wisdom and positive psychosocial

values in young adulthood. *Journal of Adult Development, 17*, 70-80.

Webster, J. D., Westerhof, G. J., & Bohlmeijer, E. T. (2014). Wisdom and mental health across the lifespan. *Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences, 69* (2), 209-218.

Wink, P. & Helson, R. (1997). Practical and transcendent wisdom: Their nature and some longitudinal findings. *Journal of Adult Development, 4* (1), 1-15.

Yang, S. Y. (2001). Conceptions of wisdom among Taiwanese Chinese. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 32* (6), 662-680.

Yang, S. Y. (2008). A process view of wisdom. *Journal of Adult Development, 15* (2), 62-75.

Yang, S. Y. (2013). From personal striving to positive influence: Exploring wisdom in real-life contexts. In Ferrari M., & Weststrate, N. M. (Eds.), *The scientific study of personal wisdom: From contemplative traditions to neuroscience*, 115-135, New York: Springer.